統計と社会統制-犯罪プロファイリング-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重田, 園江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15602

統計と社会統制—犯罪プロファイリング

重　田　園　江

本年度は、まず研究の成果として『フーコーの穴—統計学と統治の現在』（木鐸社）を出版した。この著書のなかで、とくに第七章（「プロファイリングの現在」）と第八章（「ＧＩＳ—空間を掌握する」）が、犯罪プロファイリングにかかわる研究成果である。この特殊な領域自体に関する調査や資料収集は、すでに前年度に行なっていたもので、これらを著書の末尾部分に収録するに当たって新たに考えなければならなかったのは、犯罪プロファイリングという領域が、現代社会全般に対して持つ関係であった。

そのため、犯罪プロファイリングという領域が、刑事司法の一分野である犯人捜査の効率化と実効性の向上といった実践的かつ限定的な意味ではなく、デジタル技術を用いた新たな監視のテクニック、社会統制の手法、人間をコントロールし統治する方法として捉えうることを示さねばならない。ここでとくに注目したのが、統計を用いた犯人像の推定の一手法である「ファセット理論」と、地理プロファイリングである。前者において、一連の行為連関から成る犯罪は行動の断片へと分けられ、行動変数の組み合わせとして把握される。組み合わせのパターンは統計処理によって類型化され、それを通じて犯人像が推定される。ここで犯罪者は、類例のない怪物や異常者ではない。いかに特異に見える犯罪者でも、その行動の組み合わせを他の同種の犯罪データと比較すると、何らかのパターンに当てはめることができるような行動変数の集まりなのである。

さらに、こうした行動パターンの統計分析は、犯罪と一般の人々の行動とを区別することなく、同じ統計ソフトを市場調査や行動調査に利用することができるという特性を持つ。つまり、あらゆる人の行動を、ある特定の観点から部分へと切り分け、それらの組み合わせからパターンを類型化して集団の中に位置づけることが可能になるのである。

さらに地理プロファイリングにおいては、人間の行動はデジタル化された地理上の点に関わる「位置関連情報」としてインプットされる。ここでは、個人の行動の連続性が、その人格の統一性へと統合されることはない。むしろ地理的な点と点をつなぐ情報の束として一連の行動が把握

され、そこから次の行動パターンやその人の生活様式が推定される。
つまり、人間はデジタル地図上を動く点となるのである。

こうして、人間は一九世紀から二十世紀におけるように、パーソナルに「危険人物」として認知されるのではなく、統計によって作り出された基準に従ってピックアップされる。その基準はときには「犯罪リスクの高さ」や「テロリストの危険性大」といった指標であるが、ときには「わが社の新製品を買ってくれる可能性大」といったものである。人間の行為を人格の統一性ではなく断片化された行動の組み合わせとして捉えることによって、デジタル化された監視・管理・コントロールに適した人々の掌握が可能となる。同時にこうしたテクニックは、治安、警察、刑事司法の領域と、その他の社会生活一般との区別を取り払ってしまう。このことは、「安全と自由」という昨今きわめて深刻になっている問題に直接関わるもので、今後これらのテクニックが広がってゆけば、デジタルデータの氾濫が、いつどのような意味で自由を侵害するか予測することすらできない、「監視の過剰」状態が出現する危険性がある。